

# オウム真理教をめぐって

A-45 廣瀬一隆

## 目次

序章 オウム真理教と向き合う

第1章 オウム真理教の変遷

第2章 オウム真理教と信者たち

第1節 入信の動機

第2節 麻原彰晃のカリスマ性

第3節 オウム真理教の変質

第4節 犯罪と対峙して

第5節 オウム真理教からの脱会

第3章 オウム真理教をめぐる日本の言論

第1節 オウム真理教を生んだ日本社会

第2節 どのような人々がオウムに惹かれるのか？

第4章 わたしの総括

## 序章 オウム真理教と向き合う

1995年3月、東京都の地下鉄で大量のサリンガスが撒かれ、多くの死傷者が出た。そして、その実行犯には、オウム真理教という宗教団体の名前がすぐさまあがった。教団側は、関与を否定したが捜査が進むにつれ、教団の犯行であることは明らかとなった。これをきっかけに、オウム真理教という巨大な宗教団体の闇が衆目にさらされることとなったのである。

人々を驚かせたのは、このような破壊的な行動に出る集団に多くの人々が帰依していたこと（出家信者約1600人、在家信者約15000人（1））、そして信者の中には、高学歴の、一般的にはしっかりした判断力を持っていると思われる人たちも、多数いたことである。

いったいなぜ、信者たちはこのような暴挙に出たのか。宗教の名のもとに、多くの無事の命が奪われてよいのか。実行犯たちは、ほんとうに自分たちが正しいことをしていると確信していたのだろうか。・・・と、疑問点を挙げればキリがない。実際、このような疑問を多くの人たちが、当時、持っていたと思う。日本の言論の場も、いち早く反応しこれらの疑問に答えようとしてきた。

しかし、結局、どのような結論が導きだされたのか。個人的に、オウム事件の総括が充分にできていない、とずっと思いつづけてきた。実際、この問題の総括は難しいと思う。これから始める考察においても、はっきりとした答えが出せるとは思っていない。オウムの犯行は絶対悪である、と断言できればどれほど清々するだろうとは思いますが、わたしにはそれができないことも分かっている。人間に絶対的な判断などできるわけがない。わたしにできることは、彼らの行動を、わたしの個人的な善悪の判断にとらわれず、ただ冷静に細かく分析すること、である。その中から、少なくとも彼らの行動は「絶対善」などではない、とはっきり言いきれればそれが当面の成果だろう、と思っている。

現在の日本で、オウム事件は風化の一途である。あれは、単なる狂信者集団がやったのだ、自分たちは関係ない。こんな声も聞こえてきそうだ。本当にそうだろうか？オウム真理教が狂信者集団であったことは間違いないかもしれない。だが、誰もが狂信者になる可能性があるのではなかろうか。オウム事件を考えるときに必要なことは、オウム信者たちの気持ち、考え方をしっかり自分にひきつけることだと思う。単なる特殊な例として、オウム真理教を切り捨ててはならない。

このような立場にたって、もう一度、オウム事件を考えなおしてみたいと思う。この論考では、オウム元信者たちの証言を多く扱うことになる。オウム真理教信者たちが、どのような過程で信仰生活に入り、そしてその信仰から離れていったのか。この過程を考えていきたいからである。それに絡めて、地下鉄サリン事件等の犯罪に対して、オウム側がどのようなスタンスを取ってきたのかも検証したい。

(1) カナリヤの会編 「オウムをやめた私たち」 岩波書店 2000年

## 第1章 オウム真理教の変遷

まず、どのようにしてオウム真理教は誕生し、発展していったのかを大雑把に述べておく。簡単な年譜（1）を以下に書き出してみる。

### 第1期

- 86年4月 前年来の自己の<超能力>の開発に自信を持った麻原がそのグループを「オウム神仙の会」と名乗る。
- 同年 7月 一行でインドに渡航する。ヒマラヤの奥地で麻原が、<最終解脱>を体験したと自称する。
- 87年7月 グループを「オウム真理教」と改称した。この年、弟子の<成就>者の数が急増する。
- 88年9月 富士山総本部で精神が不安定になった信者を水につけて死なせてしまう。死体はドラム缶内で焼却し、遺棄。

### 第2期

- 89年7月 オウム真理教被害対策弁護団が坂本堤ら3人の弁護士により作られる。
- 同年8月 東京都に宗教法人として認証され、教団として力をつける。と同時に、この頃から強引な入信勧誘によって、社会との軋轢がつよまる。
- 同年10月 TBSに要求し、坂本弁護士が教団を批判している放映前のビデオを見る。
- 同年11月 坂本堤弁護士一家の失踪。この事件について、オウム教団が関与した疑惑が強まる。
- 90年2月 政界進出を夢見て、衆議院選挙に幹部25人が「真理党」の名のもとに、立候補する。しかし、全員落選。麻原は幹部を集め、「これからは、ヴァジラヤーナー（金剛乗）でいく」と宣言する。これ以後教団は、反社会性へと傾いていく。

### 第3期

- 同年10月 当時本拠を構築中の熊本県波野村で、地元住民との軋轢が続出した。
- 92年6月 ロシアにモスクワ支局を開設した。それを活動の拠点とし、布教とともに兵器の購入に利用した。
- 同年 秋 各地の国立大学で講演した。世界最終戦争が近いことを予言して、多くの大学生の信者を獲得した。
- 94年3月 富士山麓の自分たちの施設群が<毒ガス攻撃>によって被害を受けていることを主張し始める。
- 同年 6月 長野県松本の住宅において、犯人不明のサリン・ガス散布があり、被害者が続出した。
- 95年3月 地下鉄サリン事件が発生する。教団はただちに事件と無関係であることを声明した。

この年譜にある、第1期～第3期という区分は、オウム真理教が<小乗仏教的の教義>から<大乘仏教的の教義>、<金剛乗の教義>（2）へと移行していく過程を、大雑把に分けたものである。

設立当初は、こぢんまりとした、少数のヨーガ行者集団であったのが（その瞑想修行の

魅力については、多くの元信者たちも語っている)、徐々に大集団となり宗教法人の認可を受ける。そして、衆議院議員選挙に失敗した頃から教団の変質は加速していった。初期では、麻原は決して近づきたい存在ではなかった (3) という。修行内容も瞑想中心の穏健なものだったが、徐々に、ワーク (出家者が、麻原からの修行として課せられる教団の運営、活動) 中心となり、さまざまな犯罪に加担させられる者もでてきた。そして、同時に麻原の絶対性 (言うことには逆らえない) も増していった。その、ゆっくりとした教団の変質が、信者には見えにくかったのだろう。教団は、緩慢に、地下鉄サリン事件へ向けて変質を遂げていったのである。

- (1) この年譜は、中村雄二郎 「日本文化における悪と罪」 (中村雄二郎著作集 第二期 VI 2000年 所収) の38ページ～39ページにある年譜と、「オウムをやめた私たち」の巻末にある年譜を参照した。
- (2) 小乗仏教とは、古い形の仏教で、個人の修行を重視し一人一人が悟りの境地に到ることを重視する。大乘仏教とは、そのような小乗仏教の考え方を否定する形で出てきた仏教で、個人だけが悟りを開いても意味はなく、世界中の生命が悟りの境地に到らなければならない、と考える。自分一人だけが悟りの境地に到ることは、よしとされない。金剛乗は、インドの後期密教のことを指す。これは、小乗、大乘とは異なり一切の人間の欲求を肯定している。さらには、ヨーガ行者に限ってのことだが殺人すら、場合によっては (その殺人が殺される側にとっての、本質的な利益になる時) 許される。
- (3) 「オウムをやめた私たち」で次のような逸話が紹介されている。  
＜昔はこんなこともあったんですよ。私が在家信者だったころ、道場への道すがら、たまたま一人で麻原さんが歩いているところに出くわしたんです。「おお、永岡、今日はどうした?」、「いやあ、ヒマなんでパクティしにきたんですよ」、「そうか。がんばれよ。」最終解脱までした人が、お付の者も連れずにトコトコ外を歩いている。この人はスゴイ。そう思わせるものがありました。＞ (廣瀬: パクティとは、教団への奉仕活動のことである) 71ページ

## 第2章 オウム真理教と信者たち

第1章では、オウム教団の変遷を辿ってみたのだが、外から見た教団の行動と実際に教団内で過ごした人たちの実情は、必ずしも合致するものではないだろう。この章では、できるだけさまざまな信者たちの体験談を辿っていきたいと思う。もちろん、人によって入信・脱会の理由、オウムへの思い入れもさまざまである。これは、どれだけ強調してもしすぎることはない。しかし、それらの体験談の間から、ある程度共通項をくくり出すことはできるのではないか。そのようにして、共通項にくられることに、信者たちは抵抗を覚えるかもしれない。それはもったもなことで、個人の経験を一般化してしまうことは、根本的な過ちですらあるかも知れない。だが、それでも、信者たちの経験の間に共通するものがあるのではないか、という立場に一時的に立って話を進めることは、無意味ではないと思う。わたしはこれから、信者たちの体験談を分析し、それぞれの経験の間にある共通項を探ろうとするわけだが、あくまでも、上に述べたような立場に立ってであることをお断りしておく。

## 第1節 入信の動機

なぜ、オウム真理教に入信したのか？この問いに対する信者の答えは、ほぼ共通している。そして、シンプルだ。「オウムは、自分の現世に対する不満に答えを出してくれると思ったから。」当然と言えば当然だろう。何らかの救いを目指して、人は宗教に入信する。だから、「オウム」の部分を変えれば、それはそのままその宗教への入信理由になる。しかし、問題はここからである。なぜ、彼らにはオウムだったのだろうか？

ここで、入信のきっかけについての証言を見てみよう。村上春樹著「約束された場所で」（1998年 文藝春秋刊 引用は文春文庫版から）にこのようなインタビューが載っている。（インタビューは村上氏。）「——ところで狩野さんは、どういうきっかけでオウム真理教の信者になったんですか？ 狩野；＜自宅で簡単にできる瞑想＞みたいな本を読みまして、それをやっていたら霊的におかしな状態になっちゃったんです。（・・・）ものも食べられなくて、体重が46キロになってしまった。今は63キロありますが。大学の講義に出ても気分が悪くて、とても勉強どころじゃありません。／それでオウムの世田谷道場に行っただけで、嘘みたいに回復していきました。（・・・）教祖と直接面談できるシークレット・ヨーガというのがありまして、それに出て、体の悪いのをどうすればいいか直接（麻原に）尋ねてみたんです。そしたら、＜君は出家だよ＞って言われました。なんか、ぱっと資質を見抜いたみたいで。（・・・）それで無理やり学校をやめて出家したようなわけです。二十二のときでした。」（39～40ページ）

この証言からどのようなことが読み取れるか。まず、狩野氏は、瞑想を試そうとしたという。最初は、恐らくオウムとは何の関係もなく、自分一人で瞑想に取り組んでみたのだろう。そして、体調を崩し、それがオウムと接触するきっかけとなった。わたしは、世の中のどの程度の人が瞑想を試みようとするのか知らないが、やはりごく少数であると思う。オウムに入信した人で、以前から瞑想に興味を持っていたと言う人は多い。この「約束された場所で」で紹介されている他の信者のなかにもそういう人はいるし、林郁夫氏（地下鉄サリン事件の実行犯）に到っては、オウムに入信する前に10年間に渡って、阿含宗において瞑想修行を経験している。

狩野氏が自分流の瞑想によって陥った身体的トラブルに対して、オウム側は（少なくとも狩野氏にとっては）適切に対処法を教えてくれたという。この、オウムの説明は明確で適切である、というのも多くの信者の証言することである。「（・・・）何事によらず受けた質問に対しては、実にきれいにさっと答えを返しています。すごいなあと思いました。すごい人だしすごい団体だなと」（「約束された場所で」68ページ、波村氏の証言）。「正しいかどうかはわからないけれど、オウムではとりあえずの説明をしてくれた。正しいかわからないけれど、それに悩んでいたり、わからなくて説明がほしければ安心はする。安心感が生じれば、それによりかかる。そして、これが正しい、これが真理だ、となれば立派なオウム信者の誕生ですよ。」（「オウムをやめた私たち」70ページより 元信者の証言）。

なぜ、オウムの説法はこれほど説得力を持っていたのだろうか。説得力の生じる原因は、さまざまであり、特定の原因に絞ることは難しい。その場の雰囲気、説法者の風格（麻原のカリスマ性については誰しも述べることだが、これについては後述する）そして、説法の内容など、いろいろな要因をあげることができる。

しかし、わたしは、オウムが必ずしも説法だけによって、信者を惹きつけたわけではないと思う。オウムの持つ瞑想カリキュラムに従って瞑想をして得られた経験が、信者たちをよりオウムへ心酔させたのだと思う。わたしには、説法の内容よりも、むしろこちらが重要だと感じられる。オウムの持っていた瞑想テクニックは、かなり高度なものだったのではないか。少なくとも、麻原の経験していた瞑想の境地は、あながち否定できないものだったのではないだろうか。

オウムの瞑想カリキュラムについての証言を紹介する。次に引用する文章は、高橋英利著「オウムからの帰還」(草思社 1996年) 52ページからの引用である。(高橋氏は、元オウム信者である。)  
「修行の技法はよく考えられており、段階を追ってレベルを上げていくための、いはば<カリキュラム>のようなものが整備されている。信者はそのカリキュラムにそってひたすら修行するのである。／ヨーガによって肉体レベルで修行の効果を確認することができるため、信者はますます修行に励めるようになっていく。ここが言葉だけの抽象的な教義と大きく違う点だと思う。われわれの体には<チャクラ>と呼ばれるエネルギーのセンターがいくつか存在しているが、ヨーガによってそれらが覚醒していくことを体感することができるのである。それは、実際に熱いかたまりのようなものが自分の体のなかを駆け登っていくような感覚である。これを体験することによって、信者はオウムの教えが<正し>かったことを確認する。そして、より上の段階へと修行を進めたいのである。その先には<神秘体験>が待っているのだ。」

このように、オウムにはしっかりとされた瞑想カリキュラムが存在していた。もっとも、教団末期になるとこのようなカリキュラムも崩壊し、薬物(LSDなど)に頼り、安易な神秘体験を信者に経験させるようになってしまっていたようだが。ともかく、オウムでの神秘体験が、信者たちにとって信仰の拠りどころであったことは確実である。

以上のことを踏まえて、人々をオウム入信へ惹きつけたのは、説法の明快さと、瞑想カリキュラムであると言えるだろう。もちろん、瞑想の内容は完全に主観的であるから、内容を云々することはできない。しかし、オウムでの瞑想修行が、信者たちに強烈な印象として残ったのは確かだ。それに関する証言は、多くある。神秘体験を経験できなかった人も当然いたようだが、その人にとっても、このような信者たちの作り出す場の雰囲気というものは、やはり神秘的なものに感じられたようである。

## 第2節 麻原彰晃のカリスマ性

上に述べたように、オウムの説法や、瞑想テクニックは信者たちにとって大きな魅力を持っていた。当然、その説法や瞑想テクニックを生み出した麻原への信仰も強まってくる。麻原のカリスマ性については、誰しもが認めるところである。だがそれは、単に瞑想テクニックに長けた宗教者ということにとどまらない、底知れないものであったようだ。そのような、麻原のカリスマ性についての証言も見てみよう。

まず麻原と近く接することのできた、元幹部の林郁夫氏の証言を引用する。「麻原は成就者に対してはかならず弟子であるにもかかわらず敬語を用いていました。弟子であっても、成就という偉大なステージに到達した同じ修行者として、仏性を現した者への<敬意>を示しているように思えて、純粋な求道心にのっとりた釈迦の教団のようだと私は思っていました」(林郁夫 「オウムと私」文藝春秋社刊 1998年 85ページから) さらに上祐氏もこう述べている。「とにかく尊師には何となく<もしかしたらうまくいくかもしれない>と思わせるカリスマ性があるんですよ。しかもそれが往々にしてうまくいった時があ

る。それが不思議でしたね。」(宮崎学著 「オウム解体 宮崎学 VS 上祐文浩」雷韻出版 2000年)。

林氏の証言からは、世間の麻原に対するイメージとは異なった麻原像が浮かび上がってくる。麻原は、少なくとも初期の段階では、逆らうことの許されない教祖として、君臨していたのではないようだ。上祐氏の証言からは、なるほど、このようなカリスマ性があったからこそ、犯罪へと教団が傾斜していったのだと納得する。

さらに、他の信者からも興味深い証言がある。「麻原さんって、感情が激しいでしょう。緩急の使い分けが巧みなんだよね。これでもか、というくらい優しいときと、殺されるんじゃないかと思うくらい怖いときがある。修行やワークで失敗したりして落ち込んでいるとき、タイミングよく声をかけてくれる。それから怒った後に「オマエとは前世で縁があったんだから、そんなことするなよ」とってボソッとと言うから、泣けてくるくらい感激する」(「オウムをやめた私たち」70～71ページ)。

この証言からは、麻原の人柄が生き生きと伝わってくる。この、麻原が感情の起伏の激しい人であったことは、中沢新一氏など信者以外の人にも証言する人がおり、麻原のカリスマ性をイメージするにあたっては欠かせない点であるようだ。

また、教団から拷問を受けたような信者でも、教団にとどまっている人が多かったという。死を垣間見るような恐ろしい拷問(もちろん修行と称して行われるわけだが)の後に、やさしい言葉をかけられると、教団への帰依心がより増すことになるという。これは、直接麻原から言葉をかけられるのではなかったようだが、教団が人心収攬をよく心得ていた証拠でもあり、先の証言にある麻原の感情の激しさともつながってくる。

以上見てきたように、麻原は人どうすれば人がついてくるかを、非常によく心得ていたようである。麻原はこのような人心収攬術と、説法、瞑想テクニックを合わせることで、教団をより強固な集団にしていった。

### 第3節 オウム真理教の変質

上の文章からだけでは、オウム教団が犯罪に走った必然性は見えてこない。ごく小規模なヨーガ行者団体が、どのようにして巨大な犯罪集団に変化していったのか。

わたしは初期の教団から、犯罪へと走る原因はあったと考える。初期の段階から教団は一貫して、麻原への絶対的な帰依を信者に要求してきたが、これは異常である。これが、オウムを犯罪組織へと育てる土壌となったと見て、まず間違いないだろう。「麻原への帰依」というシステムは、あらゆる面でオウムを強固な集団にするものだった。信者は、麻原の前では自分の判断を停止してしまう。例えば、教団内でさまざまな不平等があったとしても、それを不満に思う自分の信仰が弱いのだと思うようになってくる。自分の意見が教団の方針と食い違っても、不満に思う自分が悪い。これは、組織を固める上で非常に有効なやり方である。

これほどまでに強固な帰依心を信者たちが持つにいたるプロセスは、第1節と第2節に述べたようなものだったのだろう。そして、ひとたび麻原に対して帰依してしまうと、帰依というシステムは大変有効で、なかなかそれから抜け出すことは難しかったようだ。

もちろん、これだけでは教団が犯罪に走ったことの説明にはならない。やはり、教団を率いる麻原自身の変質が無ければ、教団は犯罪へは走らなかったはずだ。だが、麻原自身の心の動きを扱うことは慎重にしなければならないし、わたしにはその能力もない。麻原自身の変質は置くとしても、教団の体質として麻原の考えをダイレクトに反映する組織で



あったため、ひとたび麻原の進む道が狂い出すと、もうそれを止める方法は無かった、ということと言えるだろう。

#### 第4節 犯罪と対峙して

オウム真理教が問題とされるのは、地下鉄サリン事件を始めとする犯罪を起こしたからである。信者たちはこれらの犯罪に対して、どのような考えを持っているのだろうか。

まず、地下鉄サリン事件の実行犯である林郁夫氏の証言をもとに、彼がどのような心境で犯罪に走ったのかを見ていきたい。「人殺しの対象について、そのときの感覚から、私の当時のいわゆる倫理観の様子をみてみます。<村井の言葉>（1）を聞いたときの私には、人殺しをする、大勢の人が死ぬと確かにわかったのですが、個々の人としての苦しみをを感じる、人と人との縁に厩大に繋がっているのだ、という意識はそのときには出てきていませんでした。／そのときに浮かんできた<嫌だ、やりたくない>という思いは、いまから考えると、麻原のいう<観念>（2）でしたが、私にもともと培われていた倫理、宗教的な抵抗感に反応して、意識にのぼってきた思いだったのだろうと思います。倫理観が生きた熟考によって成立したものではなく、単に教えとして受容していたものだったので、人の苦しみが縁によって広がるというところまで思いいたることがなかったのではないかと考えましたが、むしろあまりにも自分が人殺しをせざるをえないことに心が捉えられていたために、対象について深く考えることを<パス>してしまったことによるのではないかと、いまは考えています。／思い返してみると、オウムにいたころの私は、社会生活の生々しさから隔離された状況で、救済の対象となる大切な個々人を麻原が一括りに<現代人は>といい切ってしまうと、あたかも、<新聞の大見出し>のようい細かい解説・説明なしの抽象的な存在としてみることに、いつの間にか慣らされてしまっていたのでした。」（「オウムと私」400ページ）

少し、長い引用になってしまったが、林氏が当時の心の様子を冷静に分析しているのは、お分かりいただけると思う。このように林氏が追い詰められた原因には、オウムでの日常生活が、肉体的にも精神的にもハードなもので、冷静な判断力は鈍磨させられていたことや、家族で出家していたために、自分一人麻原に逆らうことが容易ではなかったことも挙げられるだろう。

林氏は犯行に及ぶまで逡巡を繰り返す。特に、実際に地下鉄に乗り込んでこれから自分が殺すことになる人々を見たとき、心の葛藤は凄まじかったようだ。それでも、なぜ犯行に走ったのか？

「いまから思うと、結局、あくまで麻原が最終解脱者であり、すべてのカルマを見切り、ポアをしてくれると信じることに、私のさまざまな思いは収束していったのです。実行を前提にして生じる葛藤を、教義で理由づけて、<麻原への信>にすがりついていくしかないという心理状態になってしまっていたのです。」（同書 432ページ）

自分は犯罪に手を染めることのなかった高橋英利氏も地下鉄サリン事件の要因として、林氏と同じような見方をしている。「(地下鉄サリン事件を起こしたことの原因として) 教祖に対するすごいイメージが増幅していたことが一つ挙げられるのと、ハルマゲドンに対する考え方と、あと思考を奪う生活環境。睡眠時間が極端に少ないことと、薬物投与による倦怠感。これが絶対あったと思います。あともう一つ、自分のことよりも教祖の言うことを実践することのほうが功德になるみたいな、そういう生活環境の違い、そういうものがいくつか全部重なって、がんじがらめになって、ある意味ではそれ以外のことは出せない

い状態に追い込まれてから<じゃ、やってくれるか>と言われるので断われない。」(宮内勝典 高橋英利著「日本社会がオウムを生んだ」河出書房新社 1999年刊 178ページ) 後半部分の文意が不明瞭だが、言おうとしていることは林氏と大差ないだろう。

信者を極限状態にまで追い詰め、からっぽにしてしまってから、麻原自身の考え方を注入する。これが、末期の教団で行われていたことのようなのだ。信者たちは、自分たちの行為を「正しい」と確信して行動したのかも知れないが、その判断の過程は極めて歪んだものだった。

#### 第5節 オウム真理教からの脱会

さて、このように麻原への信仰にどっぷりと浸っていた信者たちは、いかにしてその呪縛から逃れ得たのだろうか。わたしにとっては、もっとも気にかかるところである。

この過程も、明確なイメージを持って描き出すことは難しいようだ。人によってさまざまに異なる。先ほどより何度も引用している林氏は、次のような経緯を語っている。林氏は、サリン散布後、逃亡生活に入る。ほどなく、警察に発見され、逮捕される。まだ、この段階ではオウムに対する信仰は持ったままだった。彼は、逮捕後もおおむね黙秘を守っていた(一部信者の監禁に関する容疑に対して、自分なりの説明をしたが、地下鉄サリン事件に関しては黙秘していた)。

その間、オウム信者の弁護士、青山氏の接見が断続的にあり教団からの指示を受けていた。そして、青山氏の口から語られる麻原の様子と、林氏を担当している刑事たちの人柄との間で葛藤を繰り返した。ひたすら黙秘することを要求し自らは何も発言しない麻原に対して、林氏は次のように感じるようになっていった。「麻原は自分でも折々いっていたように、本当は<小心>であって、身に害が及ぶのが怖くて、弟子の口を塞ぎ、自分の口を閉じているのではないか。実は麻原は先を見透かせる力もなく、どうしてよいか方針が立てられないで、オロオロして身を隠しているのではないか。麻原には弟子たちが思っているような超常的能力も、知恵もなく、逃げるに逃げられず、姿を現すにも現わせず、身を隠しているのではないか。」(「オウムを私」479ページ)。一方で、担当の刑事たちに対する信頼感は日に日に増していった。「敵であるはずの警察官が、どうしても敵とは思えず、ウソをつくことはできなくなっていましたし、黙秘自体が心苦しくなっていました。もし、状況が異なれば、友人になりたいとまで思いました。本気で理解しよう、真実を追求しようというプロの厳しさの魅力、それにあまり物事にこだわらない性格、それでいてどこかに<照れ>をもっている、そして批判的な<白けの部分>を大切に持っているような男っぽいところに心引かれていました。」(同書 478ページ)。このような激しい葛藤のなかで、林氏は自殺を考えるようになる。このように動揺することは、決して自分の弱さからくるのではないということを証明するためにはこれしか道はないと考えたのだ。

そして、自殺を実行に移そうとしたその刹那、自分が殺してしまった人たちに思いが及ぶ。殺してしまった人たちには、それぞれかけがえのない肉親、友人がいたのである。「一人一人を中心に、縁によって悲しみが広がっていく。悲しみが色となって、その果てしない人の縁の広がり染めていく。そのようなイメージが見えたように思いました。／その瞬間、この現実の前には、ポアなど成立しないし、何の意味ももたない、麻原は間違っている、とわかったのです。」(同書 486ページ)。この、引用部分の、最後の文章とその前の文章の間には、論理的には大きな飛躍がある。わたしは、この飛躍が大切な意味を持っていると感じるのだが、いまは立入らない。

林氏の場合は、実行犯であるだけに特殊な例といえるかも知れない。一般の信者は、最初教団がサリンを撒いたとは信じておらず、それが事実と判明し、麻原が逮捕された時点でやめていく、というケースが多いようである。あるいは、教団内で徐々に行われるようになってきた、薬物を使った瞑想などに疑問を感じて脱会する場合もあったようだ。

ただ、共通して言えることは、オウムの活動が徐々に社会の規範を犯すようになっていき、それが、ある閾値（これが個人によって異なるわけだが）を超えると見過ごせなくなり脱会に到る、というプロセスである。オウムのやることならどのようなことであろうと正しいことだと判断する、という人はゼロではないにしろかなり少数であったと思う。

- (1) 地下鉄へサリンを撒く命令は、麻原から直接言われるのではなく、村井秀夫を通して伝えられた。ここでは、その時の村井の命令を指す。
- (2) 一般的な価値観、慣習をオウムでは「観念」として、一括りにしてそれにとらわれないように勧められた。

### 第3章 オウム真理教をめぐる日本の言論

第2章では、オウム真理教の信者からの証言を見てきた。わたしが目を通したものだけでも、(元)信者による証言にはさまざまな相違、食い違いがある。それだけ、オウムという集団が大きく、矛盾に満ちたものであるということだろう。

さて、この章では、オウム事件に対する日本の言論界の反応を見ていきたい。オウム事件は大きな波紋を日本社会にもたらしたから、それに対する多くの発言がなされた。全てをフォローすることはできないが、わたしの目についたものを紹介してみる。

オウム事件を論じるに当たって、大きくふたつのアプローチの方法があるかと思う。ひとつは、オウム真理教を日本社会の中でどう位置付けるか、という問題意識のもとになされるもの。つまり、オウム事件が起こった日本社会の中にその原因を探ろうとする立場である。もうひとつは、オウム信者個人に焦点をあて、オウム真理教へ傾斜していった理由を探ろうとするものである。社会的にオウムの出現の原因となるものがいくらあったとしても、ある個人が入信する理由はそれとは別なのであるから、当然この視点は欠かせない。

もちろん、多くの論者は、このふたつのアプローチを併用しながら考察を進めるわけだが、どちらに重点を置くかは人によって異なる。わたしは、このふたつそれぞれの立場から、発言を見ていく。

#### 第1節 オウム真理教を生んだ日本社会

オウム真理教が生まれた原因は日本社会にある、という考え方はオーソドックスなものである。もちろん、さまざまな考え方がそこにはあるわけだが、乱暴に要約してしまえば、日本社会には欠陥があり、そこに付いている形で生まれたのがオウムである、ということである。

例えば、村上春樹氏はこのように言う。「日本社会というメイン・システムから外れた人々（とくに若年層）を受け入れるための有効で正常なサブ・ネットシステム＝安全ネットが日本には存在しないという現実、あの事件のあとも何ひとつ変化していない」（「約束された場所で」12ページ）。村上氏は、社会には明らかな不適合者がある割合で存在しており、その人たちを受け入れるための皿のようなものが必要だと言っているわけである。こ

の村上氏の発言からは、オウム真理教信者に限らず、それ以外のこの社会を息苦しいものと感じている人々にも共有されている問題が、提起されている。

村上氏とは異なる角度から日本社会の欠陥を指摘するものとして、野田宣雄氏のものを紹介する。彼は、1960年代の全共闘運動とオウム真理教の現象を比較したのち、次のように言う。「いずれにせよ、マルクス主義的終末論の崩壊後の広漠たる精神的空白、あらゆる価値判断を不可能にするほどの専門化された学問情報の洪水、日常生活のなかに浸透しつつしたハイテクノロジー——これだけのものが揃えば、高学歴の若者たちが大学の外のおよそプリミティブなく予言者>のもとに走ってゆく心情も理解できなくなかろう。」（「諸君！」95年7月号）。彼の発言からは、日本社会が失っているものは、精神的な充実感であり、確固とした価値判断を可能とする学問、であることが読み取れる。オウム真理教は信者たちに、精神的な充実感を与え、確固とした価値判断を下してくれたのである。もちろん、その充実感や価値観はけっして健全とは言えないものであったのだが。

このような日本社会における価値観の空白を憂える発言は、他にもある。吉本隆明氏はこう言う。「オウムの事件は、価値、価格、それから<善悪>というものが本体を離れて、なにが<善>か、なにが<悪>かわからなくなっていることのひとつの現れで、根源を解決しなくては、いくらだって第二、第三のオウムのような事件が起こりうると、ぼくはおもいます。いままで市民社会がなにげなく保留なしに是認してきた倫理観や<善悪>の基準というのが、だれからも潜在的には疑われてあぶなくなっていることのひとつのラディカルな現れだとおもいます」（「KINOKUNIYA TIMES」1995年読書週間号）。さらに吉本氏は、オウム真理教に対するスタンスの取り方についても、興味深い発言をしている。「包み込んで、こいつはあたかもすごいことをやったように思ってるけど、ほんとはたいしたことないんだよ、こういうのは宗教の<善悪>の問題からいえば大きな問題ではないよ、というところにいければ、いちばんいいとおもうんです。」（吉本隆明 芹沢俊介「宗教の最終のすがた」春秋社 1996年 73～74ページ）。この発言を吉本氏特有の極論だと捉える人もおられるだろうが、わたしには傾聴に値すると思われる。

一方で、吉本氏のようにオウム事件を思想、宗教の問題として捉えることに批判的な発言もある。浅田彰氏はこのように言っている。「社会や自己に対する強烈な否定の感情を持った若者はどの時代にも必ずいる。それが、60年代から70年代にかけては左翼の過激派に流れ、70年代後半から80年代にかけてはサブカルチャーの中で拡散した形で続いていた。その延長上で宗教ごっこをやっているうちに、国家ごっこから戦争ごっこへと暴走してしまったのがオウム真理教だとしたら、それはまさに<おたくの連合赤軍>でしょう。／（・・・）僕は（・・・）連合赤軍だったんにくだらなと思う。落ちこぼれの馬鹿が誇大妄想にかられて暴走したら、ろくなことにならないというだけのことでしょう。あんなものがその世代を代表しているとか、その世代の人間はそれを自分の問題として引き受けなければならないとか、そんなの冗談じゃないと思う。」（「諸君！」95年8月号）。浅田氏らしい、パンチの効いた発言である。

## 第2節 どのような人々がオウムに惹かれるのか？

オウム信者がどのような性格の人々なのか。実際にオウム信者たちにインタビューを試みた村上氏は次のように言う。「話をしても、宗教的な話になると、彼らの言葉には広がりというものがないんです。それでね、僕はなんでだろう、なんでだろうと、それについてずっと考えていたんです。それで結局思ったんですが、僕らは世界というものの構造

をごく本能的に、チャイニーズ・ボックス（入れ子）のようなものとして捉えていると思うんです。箱の中に箱があって・・・というやつですね。僕らが今捉えている世界のひとつ外には、あるいはひとつ内側には、もうひとつ別の箱があるんじゃないかと、僕らは潜在的に理解しているんじゃないか。そのような理解が我々の世界に影を与え、深みを与えているわけです。音楽で言えば倍音のようなものを与えている。ところがオウムの人たちは、口では「別の世界」を希求しているにもかかわらず、彼らにとっての実際の世界の成立の仕方は、奇妙に単一で平板なんです。あるところで広がりやが止まってしまっている。箱ひとつ分だけしか世界を見ていないところがあります。」（「約束された場所で」296ページ）。麻原を中心に作り上げられた幻想にのめり込むには、確かにこのような心性が必要であらうと思われる。懐疑心の少ない人々、ということだろう。

精神科医で作家のなだいなだ氏は、村上氏とは異なる視点から、興味深い発言をしている。「オウム真理教の幹部に名門大学の卒業生、しかも医学部や工学部や理学部などの卒業生が名前を連ねているのをみると、（・・・）疑問を感じるものもいるだろう。だが、見方を変えてみたらどうであろう。彼らは迷わされてではなく、迷わす方に立つべく入信するのだと。宗団に入るものすべてが、同じ動機を持っているわけではない。現実の家庭に絶望し、擬似家族的コミュニティの生活にひかれるものもいるだろう。それが実際には多数かも知れない。が、少なくとも何割かの権威志向の人間は、自分の目的を実現するために入信するのだ。」（「世界」95年6月号）。このような権威志向を、麻原を始めとするオウムの人間は少なからず持っていたのではないか。現実社会に対する過剰なまでの蔑視は、この権威志向と密接に繋がっているように思われる。現世での権力を握ることは容易ではない。そこで、オウムという疑似的な社会の中で権力を握ることで、信者は自らの権威志向を満足させていたのではないか。

村上氏はオウム信者を、一般人からは異なる心性を持つ人々として感じている。彼は、別のところでオウム信者の問題意識と自分の問題意識に重なる部分があることを認めているのだが、やはり違いは明確に感じているようだ。一方のなだ氏は、オウムに入信する人の中にも、結局一般人と同じような権威志向をもとに入信した者がいるのではないかと述べている。村上氏は、オウム信者をやはり一般の価値観からは離れた人々だと感じているのに対し、なだ氏はオウム信者も結局は世俗の価値観に縛られていたのではないかと疑問を投げかけている。二人の発言からは、現実社会に対して疎外感を感じて出家したものの、教団内では結局現実社会の真似事に終始してしまった、というオウムの姿が浮かび上がってくる。

#### 第4章 わたしの総括

以上の考察から、わたしなりにオウム事件の現時点での総括を試みしてみる。これまでの文章を読むとお分かりになると思うが、オウムに関する証言、意見は人によってさまざまに異なる。ある人は、麻原はカリスマ性に溢れた人だったというし、また別の人は、麻原は結局自分の保身のことしか考えない臆病者だったと言う。信者たちの、オウムへのスタンスも、同じ人の中でも時とともに変わっていつているし、人によってもさまざまである。オウム事件に関する言論にしても、さまざまな内容のものがある。オウム事件を宗教、思想的に重要な事件だという人もいれば、そのようなものではまったくないと主張する人もいる。何度も言うように、オウムというのは複雑で一筋縄では捉えきれないものなのであ

る。

しかし、わたしには、この「一筋縄では捉えきれない」という感覚が大切に思われる。仮に、オウム事件を説明しきったという感覚へ到ったとしたら、それは、オウム信者の現世をすべて説明しきったという感覚とどう違うのだろうか。わたしは同じだと思う。「正しい」という感覚はまったくあてにならない。これが、オウム事件の教訓である。オウム信者たちは、心底麻原に心酔していただろうが、その麻原を「正しい」とする感覚も結局消えうせてしまった（そのきっかけは人それぞれだっただろうが）。「正しい」という感覚は、到底確かなものではないということを、オウム信者たちが身をもって教えてくれたのである。

オウム事件の総括に正解などない。さまざまな総括の仕方があるだけである。オウムのイメージが人によってさまざまであるように。どのような総括の仕方に納得するかは、人それぞれである。個人個人のもつ「正しい」という感覚に委ねられる。

例えば、林郁夫氏の辿った道筋を考えてみる。彼は、誠実に物事を考えてきた人だった。わたしは、彼が自身で語っている通り、心底人類の救済を願っていたことに、疑いを持たない。しかし、それでも、彼は道を誤っていたと判断するに到る。なぜ、彼は誤ったのか？麻原を、ひいては自分を「正しい」と判断し、その自分の「正しい」という感覚、不確かな感覚を信用してしまっただけからである。そして、その後「正しい」という感覚は消え去り、後には痛恨の思いだけが残ることになったのである。

「正しい」と確実に断定することは、ほとんど不可能である。わたしはそう考える。自分は正しくないかもしれない（「正しくない」と断定することも、「正しい」と断定することと同じである）、と常に疑いつづけことが、わたしにはもっとも確固とした立場であると考えられる。あらゆるものごとを疑いつづけることが、正しいと信じる。わたしにはこの逆説的な立場こそ、確かなものとして感じられる。「正しい」という感覚がまったくあてにならないことが、オウム事件をきっかけに明らかとなった。ある時点で「正しい」と判断したものも、結局は正しくなかったという結論に到る可能性が非常に高い。要するにわれわれには、なにが「正しい」のかを判断する明確な価値基準がないのである。われわれは、ただ漠然として移ろいやすい、「正しい」という感覚を元に物事の正しさを判断することしかできない。しかし、そのことをはっきり自覚して行動しているかぎり、過ちを犯す危険性はかなり低まる。そして、誤っていないことは、すなわち「正しい」ことである。わたしたちには、このように消極的にしか「正しい」ことを実践することはできない。

現代社会において、確固とした価値観の崩壊が嘆かれている。オウム事件は、そのような現状の象徴としてあるのかも知れない。しかし、わたしはこれが健全な姿だと思う。そもそも、人間の価値観など確固としているものではないのである。ただ、その真実の姿が今まで隠蔽されてきただけである。人間の価値観の不確かさが明瞭に現れたオウム事件をきっかけとして、わたしたちは確実な価値観のない世界を生き抜いていくという、そもそもその出発点に立ち戻れたのではないだろうか。

#### 【コメント】

授業が始まった4月、5月のころの廣瀬君の発表を思い出すと、オーム真理教事件を対象としたものというより、何が正しいのかをめぐるかなり哲学的な内容のものであった。ただ、その時点では、この論攷の結論とは逆に、何が正しいかを決定できるかもしれないという考えに傾いていて、その可能性を探っているように私は感じていた。それだけに、今回書き上げられた論攷を読んで、オーム真理教事件が廣瀬君にとって適切な対象であったこと、執筆を通して懐疑論、あるいは相対主義へと彼の思索が深まっていったことを感じ取ることができた。(平)